

お互いの力でまちづくり

①

活気に満ちた ふるさとを目指して

自分たちの住むまちがいきいきして活気に満ちたふるさとになってほしい……これは、わたしたちすべての願いです。

ところが、中学校の講演会で生徒たちに「このまちが好きですか」と聞くと、たいていの場合「嫌いです」という答えが返ってきます。なぜだろう？ と考えてみると、そ

ういうまちには、地域づくり

のテーマがないということだ

す。私は長いあいだ経営コン

サルタントとして、商品化計

画にたずさわってきましたが、

「まちづくり」も、つまると

ころは、商品をつくるのと同

じだということだ。

商品を開発するには、まず

どんな物をつくるか、その用

途を明確にしなければなりま

せん。これを「まち」に置き

換えると、「まち」という商

品のスローガン、テーマをま

ず決めて、住民一人ひとりが

地域づくりの

合言葉を

決めよう。



よこしばを好きになってください。

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

抽象的な形容詞は避ける

いいまちは、やはり、そこに住む人たちが真剣に考え、そして自らはぐくんだ独自のテーマを持っています。例えば、ワインのふるさとといわれるようになった北海道の池田町は、「食生活豊かなまち」

池田町」であり、長野県・野沢温泉村の村おこしのテーマは、「スキーの村になろう」。そして宮崎県は、「太陽と緑のくに宮崎県」でした。つまり、まちづくりの目標とは、抽象的な形容詞であっ

まちづくりの合言葉を具体的にイメージできるようにすることが大事です。しかし、実際には、これがほとんどありません。だから、てんでんばらばらにみんなが

勝手な方向にすすむから、いつまでたっても「まちづくり」はできません。その結果、子どもたちが「このまちは嫌い」という発言になってしまうのです。

てはいけないということです。みんなが「私はこうしたほうがいい」「よし、これをやろう」と、自然に立ち上がるような具体的なテーマでなければなりません。

「清く明るく健康で」とか「明るく住みよいまちづくり」では、何をしたいのかさっぱりわかりません。しかし、日本のまちづくりには、このような抽象的な表現が多いのです。これではまったく個性がありません。まちづくりのテーマは若者にも子どもにも、そしてお年寄りにも理解できる行動目標でなければなりません。

私たち一人ひとりの人生にはテーマが必要であり、また、伸びている企業には素晴らしいテーマがあります。まちづくりも、同じことなのです。自分たちの住んでいるまちは楽しい、そして自分たちの考えでまちづくりができるのだ、ということ、子どものうちから教えることによって、ふるさとが好きになり、ふるさとに誇りを持つような若い力が生まれてくるのではないのでしょうか。